沙羅の樹文庫だより

NO. 194　（23 年 1 月号）

筑波山遠景22. 12. 29　夜明け（茨城県古河市より）　から　→　→　→　→　　朝へ

元旦　　新川和江

どこかで
　あたらしい山がむっくり
　起きあがったような……
どこかであたらしい川がひとすじ
　流れだしたような……
どこかで
　あたらしい窓がひらかれ
　千羽の鳩が放されたような……
どこかで
　あたらしい愛がわたしに向かって
　歩きはじめたような……
どこかで
　あたらしい歌がうたわれようとして
　世界のくちびるから
　「あ」と洩れかかったような……

本年も３密を避け予約制で開館します

2023 年１月 14 日（土）、15 日（日）
２月 18 日（土）、19 日（日）
→３月 25 日（土）、26 日（日）４週に変更
４月 15 日（土）、16 日（日）
５月 20 日（土）、21 日（日）

★若葉のころのおはなし会★

小さい人のため、大きい人のための２つ

６月 17 日（土）、18 日（日）

開館時間：土曜日　13：00～17:00
　　日曜日　10：00～15:00

子どものための読み聞かせ・おはなし会
日曜日１０：３０～１１：００

おはなし沙羅・おはなし勉強会
土曜日１０：３０～１２：３０

〒413-0235　伊東市大室高原 7-122
☎0557-51-3737（090-6039-3782）

沙羅の樹分館ゆるかの里子ども文庫
〒413-0232　伊東市八幡野 924-1
☎0557-54-1910
開室日：水曜日 13:00～15:00
　　：日曜日 10:00～15:00

昨年読んで心に残った本たち①

森　恵津子

年をとると体力が衰えるだけでなく、記憶力もつるべ落としの如く井戸の底に落ちて桶の姿も見えないほどになってしまいます。長年沙羅の樹文庫に通い何冊もの本を抱えて帰るのですが、さてどれが一番心に響き、のめり込んだ本だったかと問われると、何もでてこないのです。確かに読んでいて面白い！と思うのですが、その時間が楽しく、あとその本の題名ストーリーもさっぱり思い出せないようになってしまいます。

そこで、何年か前から手帳に文庫からお借りした本の題名・著者・出版社を、読む前に先ず書いておく事にしました。今日借りてきた本、何一んだ一年前に借りたじゃないか！なんていう本の何冊あることか！

もう一つ　昨年の夏頃からの事ですが、必ず 2～3 冊子供の本棚から本をお借りする事にしたのです。芥川賞受賞や候補作品などに頭を悩ますより、年を取ってから読む子供の本が改めて心に響き、優しく安らぎを与えてくれる事に気がついたのです。

『神さまの貨物』（ジャン・クロード・グランベール作　河野万里子訳　ポプラ社）
『オオカミが来た朝』（ジュデイズ・クラーク作　ふなとよし子訳　福音館書店）
『１３歳の沈黙（カニグズバーク作品集 9）』（カニグズバーク作　小島希里訳　岩波書店）
『豚の死なない日』（ロバート・ニュートン・ペック作　金原瑞人訳　白水社）*続・豚の死なない日　もあり。

ただ、子供の本棚から面白そうなのを選ぶのは至難の業。沙羅の樹文庫の経験豊かな方々のアドバイスが、ありがたいです。

そういえば、私の母が晩年ホームに入った時　数冊しか本を持っていかないので、これで良いの？と聞いたら、「何回読んでも　初めてみたいだから」と、言っていました。題名は『御宿かわせみ』だったのを思いだします。

文庫あれこれ◆新年のご挨拶と、寒中お見舞い申しあげます。相変わらずコロナは猛威を奮っていますが、旅に出ると、駅にも街にも乗り物にも人、人、人。◆ウクライナ情勢も良い方向に向かってはいません。それでも、生かされている私たちは、狭い日本だけでなく世界に目を凝らし、しっかり自分の考えを確認しながら暮らしていくことが大切ですね。◆あと１年数ヶ月、沙羅の樹の下で本の世界を存分に旅していただけますよう。　（西村）

再読《東京裁判とサリンジャー》　　荻野 哲夫

ロシアとウクライナの戦争が年を超えて続いています。連日のように報道される瓦礫と化したウクライナの市街、空爆の中逃げまどう市民の疲れ切った顔。戦争とは何なのか。戦争終結後、当事国はどうなってしまうのか。その答えの一つを日本における太平洋戦争を裁いた『東京裁判』に見ることができます。

『東京裁判を読む』は 1999 年に東京裁判の記録が法務省から国立公文書館に移管された後、2008 年にマイクロフィルム化され一般公開されたことを受け、日経新聞朝刊に連載された記事をもとに編纂されています。この膨大な資料を日経新聞の井上亮が昭和史研究家の半藤一利と保坂正康の協力を得て、読み解いて行くのが同書です。

ご承知の様に、東京裁判は太平洋戦争を遂行した政治主導者の責任を明らかにするために連合国側によって開かれた国際裁判です。28 名の被告は三つに分類された罪状によって起訴されました。

（イ）平和に対する罪
（ロ）通例の戦争に対する罪
（ハ）人道に対する罪

（イ）を敷衍すると、開戦布告又は布告せざる侵略戦争、国際法、条約、協定などに違反させる戦争を計画、準備、開始、遂行のいずれかを達成するための共通の計画、共同謀議への参加、としています。そしてこの共同謀議とは、二人以上の者が不法な共同目的の遂行のため合意することで、実行を伴わなくても合意だけで成立する犯罪と定義されています。国際法にもない英米法の共同謀議の概念をもって東京裁判は進められて行きます。一般に A 級、B 級、C 級と呼ばれる東京裁判の被告は全員（イ）の罪状によって起訴されました。ABC は刑の軽重ではなく、A 類 B 類 C 類といったカテゴリー分けであったようです。結果的に被告 7 名がデスバイハンギングの死刑判決を受けたものの、すべて通例の戦争犯罪（残虐行為）で有罪となった被告で、平和に対する罪のみで有罪とされた被告は死刑にはなりませんでした。

多くの議論を後世に残し終わった東京裁判を、四百数十に及び検証した同書を一読したくらいで読み解くことは困難に等しく、いわんやどんな視点からの感想などもすべて的外れに思えます。……あえて、言うと…所詮勝者が正義の名の元に敗者を裁いた、と言うことか。いや、これも違うような気がします。　――― 閑話休題 ―――

『東京裁判を読む』を勝者側から見た敗者である戦争遂行責任者の行動と思考の記録とみるならば、戦場で戦った兵士の一つの記録としてサリンジャーの『エズメ』を読んでおく必要を感じます。もちろん『エズメ』はナインストリーズに収められている一つの小説にすぎないのですが、サリンジャー自身の実体験と重なるところが多く、内容も示唆に富んでいて短編小説として上手くまとまっています。

『エズメ』の舞台は 1944 年 4 月の第二次大戦時のヨーロッパ最前線。主人公はアメリカ情報部に籍を置く軍曹です。間近に迫ったノルマンディー上陸作戦をひかえ憂鬱な日々をおくっていたある日、街をさまようと教会の中から児童聖歌隊の歌声が聞こえてくる。中へ入りその練習風景を少し見た後、近くのティルームで休んでいると、二人の子供が入ってくる。聖歌隊にいたエズメと弟のチャールズだ。二人は戦争孤児で、母親は空襲で亡くなり、父親も英国軍に従軍して戦死。軍曹が小説家であること知ったエズメは彼に「汚れ」に関する短編小説を書いてほしいと懇願する。「汚れ」とはエズメが最近経験したことだと言う。その後軍曹は転戦し、語り手は X 軍曹に変わっている。接収したドイツ人家の暗く殺伐とした部屋の椅子に座り、本を読もうとするが一向に読み進めることが出来ない。X 軍曹は神経衰弱に陥り、治療を受けているのだった。山積になった郵便物も開封する気にもなれなかったが、ふと目をやるとその中にエズメからの小さな小包があった。開封すると中にエズメの父親の腕時計があり、手紙が添えられていた。時計は父への敬意としてエズメがいつも身につけていたものであると言う。X にも戦闘中いつも身につけてもらいたいとあり、弟のチャールズからも「ラブ&キス」と添えられてあった。この単純な言葉が X 軍曹の心に響いた。手紙を読み終えると、急に X は深い眠気に襲われる。そして眠りにつく前にいままで経験した汚れを克服し、戦争前の自分に戻ることを確信する。

『ここに本当に眠気を感じている男がいるとするね、エズメ、でも、そんな男でも、自分のサー、サイノウを全部、無傷のまま持つ人間になれる見込みはいつだってあるんだよ。』（鈴木武樹訳）

小説エズメはここで終わるが、最後にサリンジャーの戦争観をよく表している小説とポツダム宣言受諾を決めた重臣会議直後に書かれた、反省なき東条元首相の手記を引用しておきます。東条は政治指導者も国民もまだ力があるのにアメリカ軍の攻撃を恐れ、手を挙げてしまったと、悲憤慷慨しています。

『戦争が終わったら戦争についてはロをとじて、ぜったいになにも語らないってことが、こんどの戦争に参加した人、これから参加する人の義務だって信じているよ。死者を英雄にまつりあげるのはやめた方がいいよ。そうしなきゃだめなんだ。ぜったい。』（「最後の休暇の最後の日」サリンジャー生涯 91 年の真実より引用）

『敵の脅威におびえ簡単に手を挙げるに至るが如き国政指導者及び国民の無気魂なりとは夢想だもせざりし・・・』昭和 20 年 8 月 13 日東条元首相手記より

東条は「汚れ」という言葉を知っていたのだろうか。

23.1 月に入る子どもの本

絵　本

『こまどりのクリスマス―スコットランド民話』（渡辺茂男訳　丸木俊画　福音館書店 1960 こどものとも年中向き）ID13848　＊クリスマスおはなし会で聴いた子どもがよかった!と言ったので入庫。

『むくどりのゆめ』（浜田廣介作　いもとようこ絵　金の星社 2005）ID13849

『王さまのおうごんのひげ』（クラース・フェルブランケ作　岡野佳訳　化学同人 2022）ID13850

『いぬがほしいの！』（ジョン・エイジーさく　いけもとなおみ訳　潮出版社 2022）ID13851

『ウマと話すための７つのひみつ』（河田桟文と絵　偕成社 2022）ID13852

読みもの

『こどもに聞かせる一日一話―「母の友」特選童話集』（「福音館書店母の友」編集部編　福音館書店 2022）ID13853

『ふしぎなメリーゴーラウンド』（リーザ=マリー・ブルーム作　はたさわゆうこ訳　徳間書店 2022）ID13854

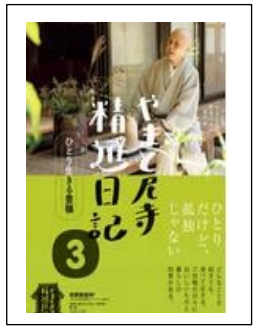
『吹雪の中の列車』（マト・ロヴラック著　山本郁子訳　岩波少年文庫 2022）ID13855

『世界のはての少年』（ジェラルディン・マコックラン著　杉田七重訳　創元推理文庫 2022）ID13856　＊カーネギー賞受賞　大人もどうぞ

参考図書（寄贈）

『絵本のつぎに、何読もう?』（越高綾乃著　かもがわ出版 2022）ID13857

『私たち、子どもの本の応援団』（越高令子ほか著　かもがわ出版 2022）ID13858



23.1 月に入る大人の本

フィクション

『目をあけてごらん、離陸するから』（大崎清夏著　リトルモア 2022）ID18919

『水　本の小説』（北村薫著　新潮社 2022）ID18920

『永遠年軽』（温又柔著　講談社 2022）ID18921

『清浄島』（河崎秋子著　双葉社 2022）ID18922

『ヘルンとセツ』（田渕久美子著　NHK 出版 2022）ID18923

『惑う星』（リチャード・パワーズ著　木原善彦訳　新潮社 2022）ID18924

『アホウドリの迷信（現代英語圏異色短篇コレクション）』（岸本佐知子編訳　スイッチパブリッシング 2022）ID18933

エッセイ　ほか

『熊楠の神―熊野異界と海人族伝説』（戸谷学著　方丈社 2022）ID18925

『女のイイ顔―田辺聖子のエッセイ』（田辺聖子著　中央公論新社 2022）ID18926

『やまと尼寺精進日記　３　ひとり生きる豊穣』（NHK『やまと尼寺精進日記』制作班著　NHK 出版 2022）ID18927

『79 歳、食べて飲んで笑って』（桜井莞子著　産業出版センター2022）ID18928

『ある行旅死亡人の物語』（武田惇・伊藤亜衣　著　毎日新聞出版 2022）ID18929

文　庫

『正岡子規ベースボール文集』（正岡子規著　岩波文庫 2022）ID18930

『捜索者』（タナ・フレンチ著　北野寿美枝訳　ハヤカワ文庫 2022）ID18931

『星新一　一〇〇一話をつくった人　上』（最相葉月著　新潮文庫 2022）ID18932

ちょい旅アルバム 22.12 月後半

22日～25日：上から雪の新潟平野、左下泊まった雲母温泉宿の屋根の雪、隣右上は、居酒屋のイカ墨炊き込みご飯美味。下は新潟名物、いい寿司。その下は吊り鮭、そして瀬波温泉日本海冬景色。

31 日早朝、東京へ帰る車中から。明けの筑波山お見送り。

28日～31日：車で主人の勤務地からまず、横田基地（飛行機見えるでしょうか）通過。筑波山は表紙で。筑波山神社、そして、ダチョウ王国（知らない動物もたくさん）。筑波山中腹の宿から関東平野の先に左、東京タワー、右スカイツリー　見えますか!!

徒然なるままに・・・　（さ・ら）

💕ちょい旅日記は続く・・・、ということで、もう旅はしないと言いつつ、気まぐれ連れ合いは、年末を、民宿の女将さんが民謡を歌うという新潟・粟島と、身近茨城ぶらぶら旅と決めた。💕クリスマスをゆっくり粟島（何もない）で、が、クリスマス寒波と元々厳しい冬の日本海。雪嵐で船は欠航。急遽近くの温泉、＜雲母温泉＞と＜瀬波温泉＞で過ごすことに。でも私には、２つとも心に残るものがあった。雲母（きら）温泉での食事、まずご飯がおいしかった、さすがコメどころ新潟。そして麹につけた日本海の魚類に米のイイ寿司（各家庭でそれぞれと言う）が旨い!! 前日新潟駅近くの居酒屋で食べたイカ墨炊き込みご飯も美味しかった。瀬波温泉の宿玄関に吊るしてあった干し鮭も風情あり。ここは、友人が教えてくれて急遽決めた温泉。彼女が幼い時、この地の温泉まんじゅうホカホカを店頭で食べたという温泉まんじゅうも食べましたよー。しかし津軽海峡冬景色ではないけれど、本当に新潟の日本海の波もすごい荒れ模様、宿から数分おまんじゅう屋さんまで歩くのに、傘はお猪口になり、体は風に押されて運ばれる感じ。

💕新潟から帰ってまた。今度は車ゆるゆる旅。茨城県はあまり行っていないからと。なぜか筑波山を眺める旅。１日目、古河、アパホテル泊。それが何と豪華な部屋で（宿が勝手に千円増しの部屋にしたそうで）、ベッド、テレビ、バスルーム、などなど一流ホテル顔負けナイス（新潟のスーパーホテルは狭く２段ベッドだった）。そしてその部屋から、連れ合い撮りました、筑波山を!!(表紙)。夜は歩いて駅近くの居酒屋に。２日目は筑波山中腹、筑波山神社の入り口の宿。５階を奮発すれば、左の写真どころか、富士山も見えるとか。足の調子が悪くなければ、つくば道を歩きたかった。３日目は、チェックインまでたっぷりで、何を考えたか相棒、ネットでダチョウ王国とやらを探し（年末で空いているところ少）、ダチョウと対面。彼らのまつ毛の長いこと、眼の澄んで可愛いこと!! 少し離れたところに知ってる&知らない小動物、鳥（七面鳥、ほろほろ鳥）、カピバラ、ヤギ、羊、ロバ、ウマ、アルパカ等々。写真左はアカハナグマ。子どもに帰って楽しむ。茨城には折々のバラを撮影して送ってくれる友人がいて、彼女が行く茨城フラワーパークにも行ってみたが、今はバラの時期ではなかった、残念。結城紬の結城市の簡易旅館に泊まり、夕食は駅裏の居酒屋。黒毛和牛の小腸と野菜煮込み鍋がおつ。そして大晦日暗いうちに発って、明けてゆく筑波山を背に、令和４年のちょい旅は終わった。さて、卯年は如何に？